みんなの努力で

子どもの頃

私は同和地区で生まれました。両親とも働いていたので、生後すぐから近くの保育所に通いました。その保育所には、なかまを大切にする歌があります。

ひとりが困れば　みんなが困る
ひとりの問題を　みんなで考え
ひとりの喜びを　みんなで喜び
ひとりの失敗を　みんなでおぎない
ひとりがすすめば　みんながすすみ
みんながみんなをよくし合いつつ
私たちと先生が　きみとぼくが
手をとり語り合い
悪いことは悪いと　正しいことは正しいと
だれもが言える



この歌は、今でも大好きな歌です。

子どもの頃の私は走るのが大好きで、よくみんなと追いかけっこをして遊びました。みんな仲良しでした。

初めて受けた部落差別

小学一年生のある日、友だちの誕生会がありました。私はお祝いの手紙を持って、友だちの家へ急いで行きました。しかし友だちは、

「お父さんが、〇〇ちゃんはあの保育所に通っていたから友だちになったらだめだって。」

と言いました。私は、友だちがなんでそんなことを言うのか分かりませんでした。

結局、私だけ誕生会に参加できませんでした。悲しくて悲しくて親には言えませんでした。

またある時は、別の友だちのお母さんに家の門をすごい勢いで閉められ、こう言われました。

「あそこの子ども会の子はここから入ったらいかん！」

子ども会は、私たちが部落差別をなくすために、いろいろな勉強や取り組みをしている、大切な所です。

それを、そんなふうに言われて悲しかったし、とても悔しかったです。

私はただ、友だちと一緒に遊んだり仲良くしたかっただけなのに、同和地区の子というだけで差別されていたことが、後になって分かりました。

知ってほしい、分かってほしい

私は、自分のことを信頼している友だちに話したことがあります。友だちは私のことを

「かわいそう。」

と言いました。

だけど私は、同和地区に生まれてかわいそうじゃないです。かわいそうなんて、人に言われたくないです。

私はただ、分かってほしいのです。

みんなと同じように生まれてきたこと。

みんなと同じように人としての権利があること。

差別されずに、幸せに生きたいと願っていることを。

人は変わる、変えられる

私は今、二人の子どもを育てています。

『みんなで差別のない、明るい未来にしたい。』

と子どもたちは、日々子ども会でがんばっています。

そして私も、同和問題や人権問題について勉強しています。ある学習会で、

「昔の自分は、部落差別なんてその人たちの問題であって、自分には全く関係ないと思っていた。むしろ、そうやって自分も差別をしていた。」

と自分の心の内を話してくれた人がいました。

その人は、同和問題の研修に参加したり、識字学級で同和地区の人とふれ合ったりするうちに、自分の考えが誤っていたことを教えられ、過去の自分をものすごく反省していました。その人は今、私たちと共に、さまざまな差別の勉強会に参加したり、子どもまつりに参加したりしています。

その姿を見た時、私は胸が熱くなり、涙が込み上げてきました。一緒に部落差別をなくそうとしてくれる仲間が増えて嬉しいからです。それと同時に、「無関心だったり差別をしたりしていた人も、変わることができるんだ。」ということに、私は気づきました。

私はずっと、部落差別って絶対なくならないとあきらめていました。私たちがどんなにがんばっても、差別をする人が後を絶たないからです。

でも、部落差別のことを正しく知ってもらえば、差別はみんなの努力でなくせると分かったのです。この気づきと子どもたちの姿は、私にとって希望の光となりました。だから私もがんばります。

ひとりは　みんなのために
みんなは　ひとりのために

